

神山町の社寺建築

社寺建築班（郷土建築研究会）

尾方 洋子¹⁾・岡部江利子²⁾・黒崎 仁資³⁾
 坂口 敏司⁴⁾・富田 眞二⁵⁾・中野 真弘⁶⁾
 板東 知子⁷⁾・原田 知美⁸⁾・松永 佳史⁹⁾
 森兼 三郎¹⁰⁾・龍野 文男¹¹⁾

1. はじめに

神山町は徳島県のやや中央部、四国山地の東部に位置し、8カ市町村と隣接する。町域の約83%を山林が占め、中央を上分奥屋敷に源を発する鮎喰川が縦断するかたちで流れ、徳島市を経て吉野川にそそぎこむ。昭和30年（1955）に阿野、鬼籠野、神領、下分、上分の5カ村が合併して現在の神山町となった。

私たち社寺建築班は7月27日から町内に入り、社寺建築を建築学的見地から調査した。

神社は27カ所を、寺院は14カ所とその境内にあるお堂建築を調査し（図8）、それぞれの建築様式や構造などを一覧表にまとめ、うち5カ所については詳細調査を行い、実測図を作成した。神社では、神領字西上角の上一宮大栗神社（図1）をはじめとする春日造の本殿が3社みられたほか、町の文化財に指定されている、大工高橋永八による明治期の本殿がみられた。また、寺院では建立年代が江戸中期から後期と様式より推定されるお堂建築（図2）がみられた。以下、その内容について報告するとともに、神山町にみられる青石文化についても紹介する。



図1 上一宮大栗神社（春日造）



図2 焼山寺大師堂

- 1) 小松島市小松島町馬場ノ本24-12 2) 岡部建工 3) 黒崎建設 4) 坂口建築設計室
 5) 富田建築設計室 6) 真建築都市研究室 7) 徳島県営繕課 8) 穴吹カレッジ
 9) Y. M. 設計室 10) A + U 森兼設計室 11) 龍野建築設計事務所

2. 神山町の社寺建築概要

1) 神社建築の概要

神社は27社を調査し、社殿の建築様式や建立年代などを一覧表にまとめた(表1)。その中で、本殿の構造はすべてが木造、建築様式では、一間社見世いっけんしゃ柵み小社殿せだなしょうしゃでんの4社を除き、16社が流造ながれづくりと圧倒的に多く、次いで上一宮大栗神社、鬼籠野神社、杉尾神社の3社が一間社春日造しょうさんじで、焼山寺境内の十二社神社のみ三間二間入母屋造であった。

なお、流造のうち6社が三間社、9社が一間社で、少童神社のみ二間社であった。また、流造のなかには悲願寺境内の十二社神社(大工高橋永八、建立年代明治、町指定文化財)(図3)のように一間社流造並列型のものもみられたほか、同じ大工による新田八幡神社(図4)、正八幡神社(図5)は共に町指定の文化財となっており、柱、梁、長押はりや木階なげしの隅々まで直接彫刻を施した地紋彫りきざしは見事である。ただ、正八幡神社は後から彩色が施されているが、その仕上げ方は少しさみしく感じられる。

そのほか、御嶽神社の本殿においては、内法長押うちのりに地紋彫りがみられ、今回調査したなかでは唯一、破風はふが中折れ式の流造であった。

本殿において、脇障子わきしょうじの付くものが17社と多く、青石による基壇きだんをもつものが14社あった。本殿脇には随神像ずいしんぞうはみられなかったが、狛犬こまいぬを安置しているものは3社みられた。

腰組は杉尾神社と十二社神社(焼山寺境内)の2社でみられた。一方、県内では持送りのついたものや井桁いげたで組まれた本殿は多くあるが、神山町内においては、御嶽神社の井桁組を除いてみられなかった。

神社境内において、随神像をもつものが8社、そのうち随神門として三間一戸八脚門さんげんいっこはっきゃくもん(図6)をもつものが5社みられた。

随神像とは、神社や廟を守護するために安置された一対の神像をいう。向かって右側の神像は左大神・看督長さだいじん(かどのおさ)で、俗に左大臣とよばれ、武官の服装をし兵杖ひょうじょうを持つ。向かって左側の神像は矢大神・門昏神やだいじん(かどもりのかみ)で、俗に矢大臣と呼ばれ、弓矢を持って、本来は片足だけをあぐらにしている。随神像を安置する随神門は、神社外郭に設けられる門であり、仏寺の仁王門の仁王にならって構えたものといわれ、三間一戸八脚門は、正面が三間で両脇に随神が安置され、中央の一間が通路となっている。

2) 寺院・お堂建築の概要

寺院を14カ所とその境内にあるお堂建築を調査し、建物の建築様式や建立年代などを一覧表にまとめた(表2)。

寺域を土塀により囲い、伽藍配置をもつものとして焼山寺があり、四国霊場十二番札所としての格式をそなえ持つほか、大きな寺院としては、悲願寺や神宮寺があげられる。

ほとんどの寺院において、生け垣、棟門むなもんによる構えがみられ、本堂においては、五間の五間といった大きな本堂はなく、民家建築である茅葺き四方下屋かやぶきしほうげやの本堂もみられた。鐘楼しょうろうにおいても、小規模な四足鐘台よつあししょうだいのみで、袴腰はかまごしをもつ鐘楼はみられなかった。山門さんもんは悲願寺と焼山寺において、三間一戸八脚門の仁王門がみられたが、楼門はみられなかった。

そのようななか、善覚寺ぜんかくの大師堂は建立年代が江戸中期と彫刻や様式などから推定されるほか、西明寺さいみょうの本堂は天井絵に弘化4年（1847）と描かれており、幕末の建物である。

また寺院の象徴である塔は県内では数少なく、町内においてもみられなかったが、悲願寺境内にある葆光ほうこう（図7）は木造二層で袴腰をもつ常夜灯である。

最後に、神山町内に散在するお堂建築については、『神山の民俗』に報告されているほか、今回調査した、新田八幡神社、正八幡神社、十二社神社（悲願寺境内）は町指定の文化財であり、『徳島の文化財「建造物」』に報告されている。また、上一宮大栗神社、鬼籠野神社、十二社神社（悲願寺境内）、十二社神社（焼山寺境内）、大師堂（焼山寺境内）については『阿波の寺社建築』を参照されたい。



図3 十二社神社(悲願寺境内)



図4 新田八幡神社



図5 正八幡神社



図6 黒松神社の随神門



図7 悲願寺境内の葆光

表1 神社建築調査一覧表

神社名	鎮座地	創建	祭神	旧社格
1 天王神社	神領字本小野506	不詳	素戔鳴尊・田姫命	旧無格社
2 左手宮八幡神社	阿野字宮分728	不詳	応神天皇 神功皇后 高良大神 武内宿禰公 大山祇命 天御中主神 素戔鳴尊	旧村社
3 二之宮八幡神社	阿野字二ノ宮98-1	文治元年(1185)	応神天皇 神功皇后 仁徳天皇	旧村社
4 秋葉神社	阿野字五反地	不詳	加俱土命	旧無格社
5 少童神社	阿野字五反地208-1	安政元年(1854)再建	少童命 誉田別命	旧村社
6 新田八幡神社	上分上山字金泉845	不詳 永享2年(1430)	応神天皇	旧村社
7 聖皇神社	上分上山	不詳		旧無格社
8 御崎神社	上分上山字江田897	昭和39年設立登記	奥津彦命・奥津姫命	新設立
9 東宮神社	上分上山字殿宮975	不詳	天照皇大神・国常立命	旧無格社
10 大宮神社	上分上山字殿宮	不詳		旧無格社
11 黒松八幡神社	上分上山字川又1447	永正8年(1511)	応神天皇 神功皇后 仁徳天皇 景行天皇 成務天皇 仲哀天皇	旧村社
12 十二社神社	神領字高根133 悲願寺境内	不詳		旧無格社
13 宇佐八幡神社	下分上山字西寺79	承久2年(1220)		旧郷社
14 八幡神社	阿野字馬地20	寛文年間(1661~73)	誉田別尊 息長足比売尊 市杵島比売尊 武内宿禰命	旧村社
15 八幡神社	鬼籠野字喜来262	不詳	応神天皇 神功皇后 武内大臣	旧村社
16 鬼籠野神社	鬼籠野字東分2-2	宝治2年(1248)	大日靈尊 金山彦命 埴安姫命 軻遇突智命 匂々麴馳命 罔象女命 国常立命	旧村社
17 正八幡神社	上分上山字中峰42-1	不詳	応神天皇	旧無格社
18 十二社神社	下分左右内字地中319 焼山寺境内	不詳 (1597)社殿改築棟札	天神七代他神五代の十二神	旧村社
19 上一之宮大栗神社	神領字西上角330	承久3年(1221) 阿波守護小笠原氏の縁		旧郷社
20 八幡神社	神領字本上角176	不詳 天正3年(1575)	彦火々出見神 応神天皇	旧郷社
21 立岩神社	鬼籠野字元山746	不詳	級長津彦 級長戸辺命 罔象女命	旧無格社
22 御嶽神社	鬼籠野字中津川252	不詳	国常立尊 少彦名命 大己貴命	旧無格社
23 船尽神社	阿野字齒の辻1	不詳 三代実録に記録	船尽比売尊 天手力雄尊	旧村社
24 八幡神社	阿野字長谷456	不詳	誉田別尊	旧無格社
25 八坂神社	阿野字折木109	不詳	須佐之男命	旧村社
26 杉尾神社	鬼籠野字一之坂319	不詳	建御名方命	旧村社
27 八幡神社	阿野字雨返64	不詳	誉田別命 足仲津彦命 息長足比売命 大日靈命	旧村社

平成11年9月末日現在

鳥居様式(材料)	本殿 建築様式	拝殿 建築様式 向拝	特記事項()は築造年代	A	B	C	D	E
(木造・姫檜)	一間社流造見世棚板葺(覆屋・小社殿)	拝殿兼舞台 四間切妻造鉄板葺 向拝ナシ	本殿見世棚三体					○覆
両部(木造)	三間社流造銅板葺	五間入母屋造銅板葺 一間大唐破風	昭和42年建立 本殿は二之宮神社を模倣	○				
明神(御影石)	三間社流造銅板葺	五間入母屋造銅板葺 一間大唐破風	幣殿のみ新しく改修	○				
		三間入母屋本瓦葺 向拝ナシ (覆屋兼拝殿)						
明神(御影石)	二間社流造銅板葺	三間入母屋造棧瓦葺 一間縋破風 境内堂 三間堂切妻造一間縋破風	随神像 (参道へRC門構えにて安置)	彫				○
台輪(人研洗出し)	一間社流造銅板葺	五間入母屋造鉄板葺 一間大唐破風	明治19年建立 大工:高橋永八	彫	石			
	一間社流造見世棚 (小社殿)	三間切妻屋造 向拝ナシ (覆屋兼拝殿)						
台輪(人研洗出し)	一間社流造鉄板葺	五間入母屋造鉄板葺 一間入母屋破風						○
(木造)	一間社流造見世棚銅板葺 浜床	切妻造銅板葺 向拝ナシ	同形式にて春宮神社あり	○				○
	三間社流造鉄板葺	三間切妻屋造鉄板葺 向拝ナシ						
台輪(御影石)	三間社流造銅板葺 浜床	五間入母屋造銅板葺 一間大唐破風	随神門 (三間一戸八脚門棧瓦葺)	彫				○
	一間社流造銅板葺 並列型 浜床	拝殿幣殿向拝ナシ	「阿波の寺社建築」参照 本殿は向拝各一間 大工:高橋永八	彫				○
台輪(人研洗出し) 大鳥居	三間社流造 腰組	七間切妻造銅板葺 軒大唐破風付	随神門 (三間一戸八脚門切妻鉄板葺)		木			
明神(御影石)	一間社流造銅板葺	三間入切妻造本瓦葺 一間縋破風	随神門 昭和4年建立 (三間一戸八脚門切妻本瓦葺)	彫				
明神(御影石)	一間社流造鉄板葺	切妻造本瓦葺 一間縋破風		彫				○
	一間社春日造銅板葺 軒唐破風	五間切妻造本瓦葺 一間縋破風	「阿波の寺社建築」参照 随神門 (三間一戸八脚門切妻本瓦葺)	杵				
明神(御影石)	一間社流造銅板葺	四間切妻鉄板葺 一間入母屋	町指定文化財 大工:高橋永八	○				○
明神(御影石)	三間二間入母屋造銅板葺 一間縋破風・腰組三手先	三間入母屋造鉄板葺 一間大唐破風	「阿波の寺社建築」参照	○				○
台輪(人研洗出し)	一間社春日造	五間入母屋造銅板葺 一間大唐破風	「阿波の寺社建築」参照 随神門(三間一戸八脚門 切妻棧瓦風銅板葺)	○	木			○
台輪(御影石)	三間社流造銅板葺	五間入母屋造銅板葺 一間大唐破風						○
	見世棚造板葺(小社殿)	三間妻入切妻造鉄板葺 庇付 (覆屋兼拝殿)						
明神(御影石)	一間社流造鉄板葺	三間切妻造スレート瓦葺 一間縋破風			杵	○		○
明神(御影石)	不明(覆屋)	三間妻入母屋棧瓦葺 庇付						
明神(御影石)	一間社流造見世棚板葺 (小社殿)	三間切妻造波鉄板葺 一間縋破風	拝殿に部帳あり					
明神(御影石)	一間社流造こけら葺	三間妻入母屋造鉄板葺 一間大唐破風	推:幕末から明治初期	○				
明神(御影石)	一間社春日造銅板葺 浜床・腰組・彩色	五間入母屋造銅板葺 広一間縋破風	推:幕末 随神石像	彫				○
台輪(人研洗出し)	一間社流造銅板葺	三間入母屋造鉄板葺 一間縋破風	随神石像	○				○

本殿 A:板脇障子、彫は彫刻あり B:狛犬(木造・石造) C:井桁組 D:持ち送り E:青石基壇

表2 寺院建築・お堂建築 調査一覧表

寺院名	所在地	開基	宗派	山号	本尊
A 観善寺	阿野字宮分	不詳	真言宗御室派	二竜山月曜院 真言宗仁和寺の末寺	阿弥陀仏
B 禪定寺	阿野字井ノ谷	慶安元年 (313年前)	真言宗御室派	天神山鎮守院 真言宗仁和寺の末寺	阿弥陀仏
C 妙法寺	上分字江田1206		真言宗古義派	宝珠光明山西之坊来迎院	阿弥陀如来
D 悲願寺	神領字高根135	不詳	真言宗	高根山観音院 長満寺の末寺	千手観音
E 明王寺	下分字東寺56	不詳	真言宗古義派	天神山威徳院	不動明王
F 西光寺	下分字東稲原13	不詳	真言宗	粟成山菩提院	不動明王
G 焼山寺	下分左右内字地中319		真言宗	摩廬山正寿院	虚空地藏菩薩
H 善長寺	下分字黒口		真言宗古義派		阿弥陀如来
I 神宮寺	神領西上角439	不詳 (平安中期)	真言宗	大栗山成就院 嵯峨大覚寺末の中本寺	文珠菩薩
J 善覚寺	神領本上角50	500~600年以前	真言宗	弥勒山宝蔵院 神宮寺の末寺	弥勒菩薩
K 初白山不動院	鬼籠野字西分399	不詳	古義真言宗	善覚寺の末庵	梵字不動明王
L 真光寺	鬼籠野字日浦175	不詳	浄土真宗西本願寺派		阿弥陀如来
M 神光寺	鬼籠野字喜来435	不詳	真言宗(高野山)	鬼飯山阿弥陀院	阿弥陀如来
N 西明寺	阿野大字広野字白獄62	不詳	真言宗古義派	金玉山 西京大覚寺の末寺	十一面観世音菩薩

平成11年9月末日現在

建物名	屋根形式	屋根材	建築年代	建物名	屋根形式	屋根材	建築年代	特記事項()は築造年代	
本堂庫裏	寄棟造(下屋付)	茅葺鉄板巻		釈迦如来堂	方形造	棧瓦葺(RC造)			
一間入母屋向拝									
本堂庫裏	寄棟造(下屋付)	茅葺鉄板巻							
付玄関入母屋造									
本堂	七間切妻鉄板葺	広一間	縄破風向拝						
本堂	三間妻入	入母屋造鉄板葺	一間	縄破風向拝	葆光(灯楼)	二重常夜灯袴腰銅板葺			
					仁王門	三間一戸八脚門			
本堂	七間入母屋造	棧瓦葺	付玄関入母屋	堂	三間方形造	棧瓦葺	一間	縄破風向拝	
							一間	棟門本瓦葺	
本堂	五間入母屋造	銅板葺		水子地藏堂	三間方形造	銅板葺	四足鐘台		
				切妻本瓦葺	権現堂	妻入寄棟造	スレート葺	(推:江戸後期)	
本堂	入母屋造	銅板葺	一間	縄破風向拝	仁王門	三間一戸八脚門	入母屋造	銅板葺	
					四足鐘台	入母屋造	銅板葺	大師堂「阿波の寺社建築」参照	
								三間方形造銅板葺	
								一間	縄破風向拝
本堂	三間寄棟造	茅葺鉄板巻	き	一間	庇向拝				
本堂	方形造	コロンアル瓦葺	(RC造)	大師堂	三間方形造	銅板葺	広	一間	縄破風向拝
								四足鐘台	
本堂	入母屋造	鉄板葺	もこし付	大師堂	三間方形造	鉄板葺	一間	縄破風向拝	
								(彩色)	
本堂	切妻造	本瓦葺							
本堂	三間入母屋造	銅板葺	(RC造)						
								昭和47建替	
本堂	五間寄棟造	茅葺	き鉄板巻						
本堂	三間寄棟造	本瓦葺	一間	縄破風向拝					
								弘化4年(1847年)	



1) 黒松八幡神社本殿 (No.11)



2) 御嶽神社本殿 (No.22)



3) 杉尾神社本殿 (No.26)



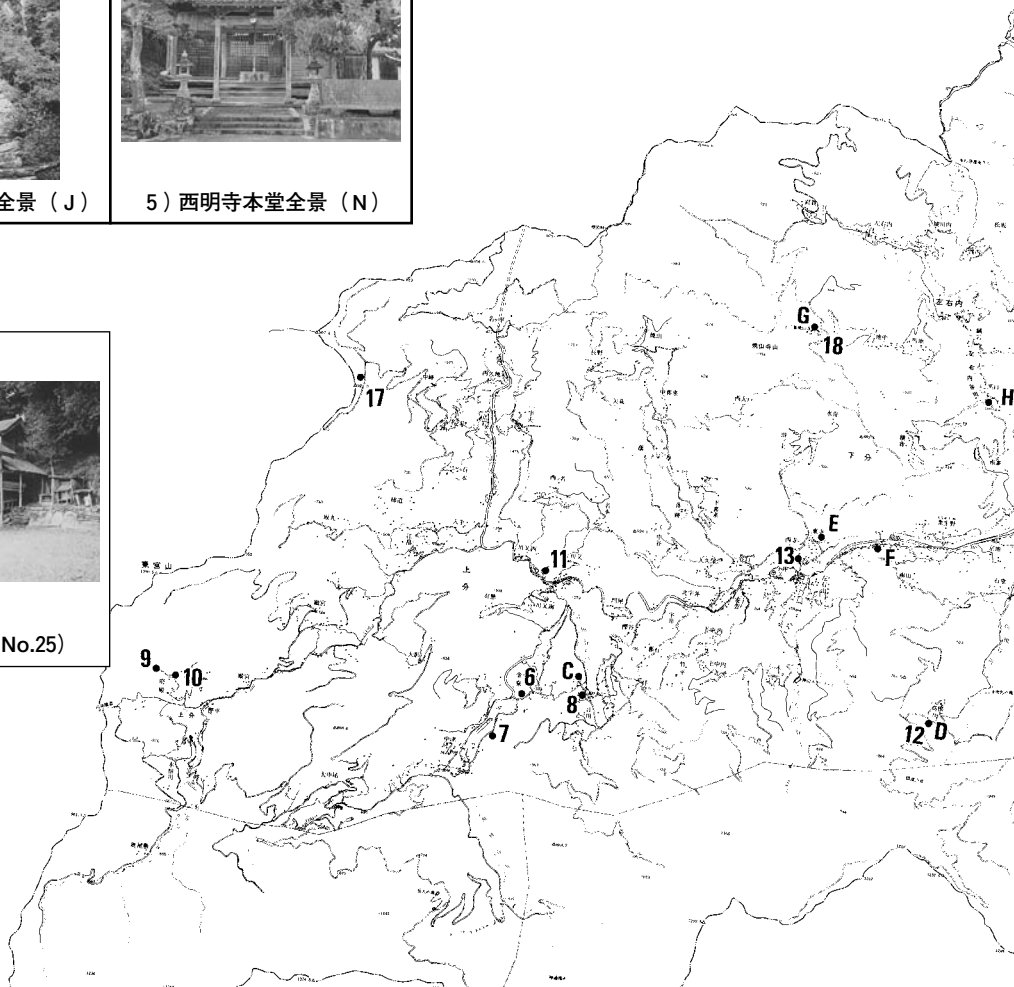
4) 善覚寺大師堂全景 (J)



5) 西明寺本堂全景 (N)



八坂神社全景 (No.25)



十二社神社本殿 (No.12)



新田八幡神社本殿 (No. 6)

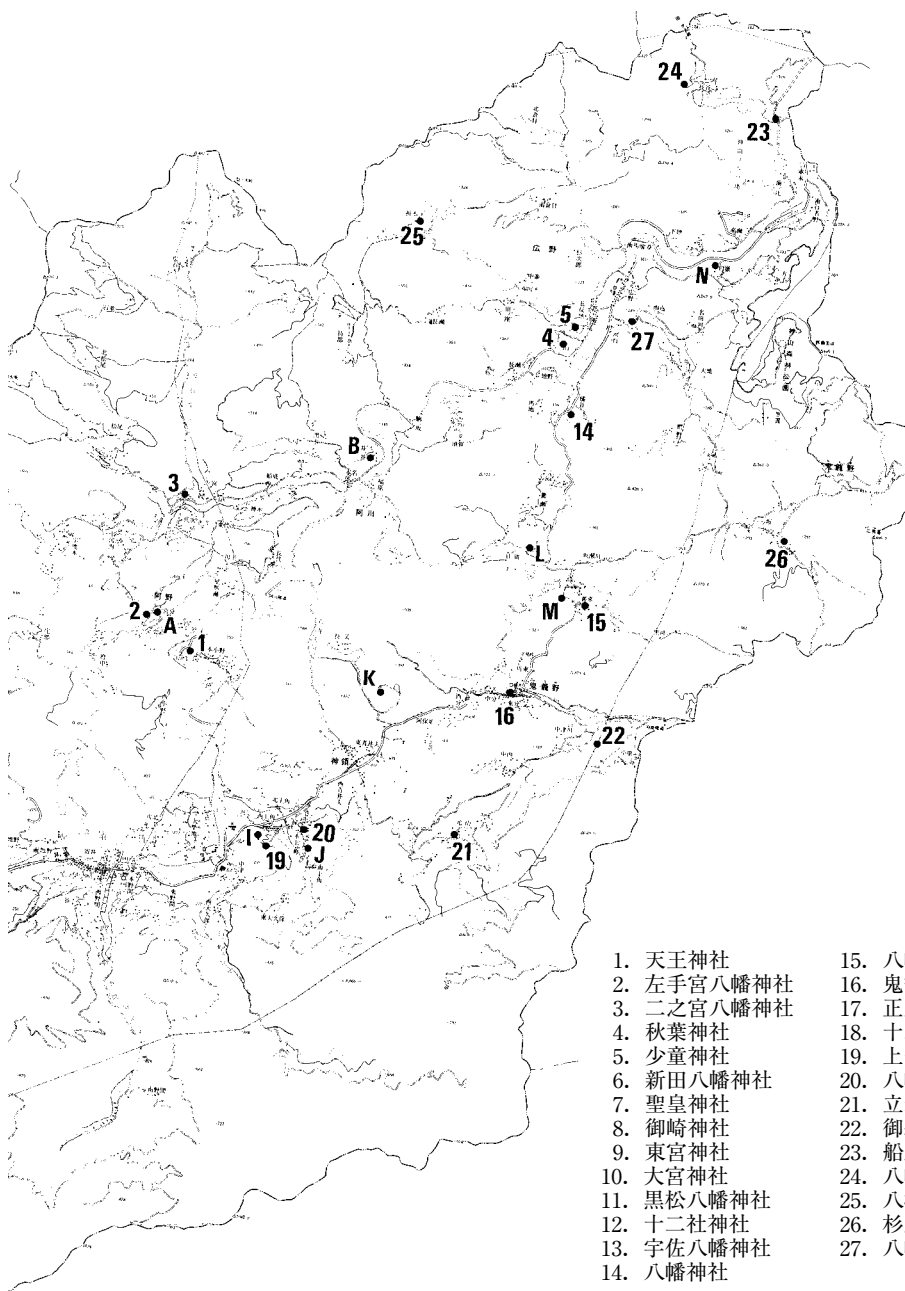


正八幡神社本殿 (No.17)



十二社神社本殿 (No.18)

図8 神山町の社寺建築案内図



- | | | |
|------------|--------------|-----------|
| 1. 天王神社 | 15. 八幡神社 | A. 観善寺 |
| 2. 左手宮八幡神社 | 16. 鬼籠野神社 | B. 禪定寺 |
| 3. 二之宮八幡神社 | 17. 正八幡神社 | C. 妙法寺 |
| 4. 秋葉神社 | 18. 十二社神社 | D. 悲願寺 |
| 5. 少童神社 | 19. 上一之宮大栗神社 | E. 明王寺 |
| 6. 新田八幡神社 | 20. 八幡神社 | F. 西光寺 |
| 7. 聖皇神社 | 21. 立岩神社 | G. 焼山寺 |
| 8. 御崎神社 | 22. 御嶽神社 | H. 善長寺 |
| 9. 東宮神社 | 23. 船尽神社 | I. 神宮寺 |
| 10. 大宮神社 | 24. 八幡神社 | J. 善覚寺 |
| 11. 黒松八幡神社 | 25. 八坂神社 | K. 初白山不動院 |
| 12. 十二社神社 | 26. 杉尾神社 | L. 真光寺 |
| 13. 宇佐八幡神社 | 27. 八幡神社 | M. 神光寺 |
| 14. 八幡神社 | | N. 西明寺 |



上一之宮大栗神社全景 (No.19)



鬼籠野神社 (No.16)



西光寺阿弥陀堂 (F)



明王寺 (E)



焼山寺 (G)



悲願寺 (D)

3. 神山町の各社寺

1) 黒松八幡神社 (表1-11) 鎮座地-上分上山字川又1447

[本殿] 木造 三間社流造 銅板葺

身舎 - 粽^{もや}円柱^{ちまき} 切目長押^{きりめ} 内法長押^{なかにほ} 頭貫木鼻^{かつらぬき}(象^{きばな}) 出組^{でぐみ} 台輪^{だいわ} 彫刻支輪^{しりん}
 中備^{なかぞなえ} 彫刻^{ちやく} 蓐股^{くわ} 妻飾^{つまかざり}・二重虹梁^{こうりょう} 大瓶束笈型付^{たいへいつかおいがたつき} 二軒繁垂木^{ふたのきしげたるき}
 向拝^{こうはい} - 広一間角柱^{ひろいっけん} 虹梁型頭貫木鼻^{しし}(獅子^{しし}) 繫海老虹梁^{つなぎえび}(錫杖彫^{しゃくじょう}) 出三斗^{でみつど}
 手挟^{たばさみ} 三方切目縁刻高欄^{きれめ えんはねこうらん} 脇障子^{のほりぎ} 昇擬宝珠高欄^{ほし} 木階七級(木口)^{こぐち} 浜床^{はまゆか}

(図9、10)

この社は旧村社で、町の中央部^{かみやま}上分上山に鎮座する。創建は永正8年(1511)である。本殿は大規模な三間社流造^{ちぎ}で千木^{かつおぎ}や鯉魚木は無く、拝殿より一段上がった場所に青石基壇を設けて建つ。身舎は粽円柱を切目長押と内法長押で固め、柱頭部には頭貫(象鼻)と木鼻付台輪が載る。さらに柱間には彫りの深い中備彫刻(図11)や彫刻蓐股を詰める。妻飾(図12)は出組(一手先)で虹梁を受け、彫刻板支輪や二重虹梁、大瓶束笈型付とする。向拝は三方に切目縁を回し芻高欄が脇障子に取り付く。また正面に一对の彩色のある木造狛犬を安置する。浜床を張り木階七級の昇擬宝珠高欄が付く。境内には切妻、棧瓦^{さんかわらぶき}葺の小規模な随神門(三間一戸八脚門)が建つ。この門は全面を開放にし、後方に随神像を安置する形態をとる。



図9 身舎正面

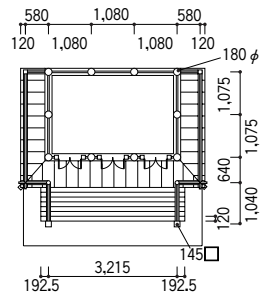


図10 本殿平面図



図11 本殿柱間中備彫刻



図12 本殿妻飾

2) 御嶽神社 (表1-22) 鎮座地-鬼籠野字中津川252

[本殿] 木造 一間社流造 鉄板葺

身舎-円柱 切目長押 内法長押 頭貫紗綾形地紋彫 木鼻 (拳) 出三斗

中備墓股 妻飾・虹梁 大瓶束笈型付 二軒繁垂木

向拝-角柱 虹梁型頭貫木鼻 (龍) 連三斗 繁海老虹梁 手挟 三方切目縁

擬宝珠高欄 脇障子 木階五級 (木口) 昇擬宝珠高欄 浜床

千木 豎魚木-なし

(図13、14)

鬼籠野東分の郵便局より東約1.0km、佐那河内村境の山中に鎮座する。創立年月日は不明、国常立尊・少彦名命・大己貴命の三神を祭神とする。

本殿は井桁で組まれた土台の上に載る小規模な一間社流造 (中折れ) で、屋根は鉄板葺きである。三方に切目縁と擬宝珠高欄が身舎背面脇障子 (羽目板は没落している) まで回る。身舎は円柱で切目長押と内法長押で補強し、柱頭部は頭貫と絵様の肘木付き出三斗で二軒繁垂木の軒を支える。妻飾 (図15) は斗と舟肘木付きの中備墓股に虹梁を載せ、さらに大瓶束笈形をたてる。向拝とのつなぎの海老虹梁 (図16) は身舎の頭貫と向拝の頭貫をつないだ為勾配が急になり、打越垂木と虹梁との間が空きすぎた為、安定性 (意匠的要素が強いと思われる) を保つ為に手挟を二重に配置する。向拝の柱は几帳面の角柱で頭部には虹梁型頭貫 (龍の木鼻付き) と絵様肘木付き連三斗を載せ、向拝の軒を支える。木階は木口階段の五級で、昇高欄が付き、その下部には浜床を張る。



図13 本殿正面

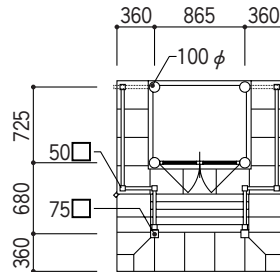


図14 本殿平面図



図15 本殿妻飾



図16 海老虹梁と手挟

3) 杉尾神社 (表1-26) 鎮座地-鬼籠野字一之坂319

[本殿] 木造 一間社春日造 銅板葺

身舎-円柱 切目長押 内法長押 頭貫木鼻 (拳) 台輪 大斗^{だいと}肘木 出三斗
 腰組 (彩色) 中備彫刻 妻飾・虹梁 大瓶束 二軒繁垂木
 向拝-角柱 (唐戸面) 虹梁型頭貫木鼻 繫海老虹梁 (錫杖彫)
 三方切目縁擬宝珠高欄 脇障子 (彫刻) 昇擬宝珠高欄 木階五級 (木口)
 浜床

(図17、18)

この社は旧村社で町の北東部鬼籠野一之坂に鎮座する。本殿は一間社春日造で、青石基壇の上に建つ。身舎は円柱を切目長押と内法長押で固め、柱頭部は頭貫 (拳木鼻付) と台輪が載る。三方に切目縁と擬宝珠高欄があり、彫りの深い彫刻脇障子 (鯉の滝昇り) (図19) に取り付く。特徴としては腰組 (図20) と呼ばれる切目縁の下部に設ける斗組みが用いられているのと、隅行^{すみゆき}によって身舎と向拝の垂木を同じ繁垂木としていることである。また軒裏をはじめ外部全体が朱に彩色されている。浜床を張り木階五級の木口階段が付く。向拝は角柱 (唐戸面) に虹梁型頭貫木鼻 (獅子) がつき、身舎とを海老虹梁でつないでいる。創建は不詳であるが、幕末以前に建てられたものと様式より推定される。



図17 本殿正面

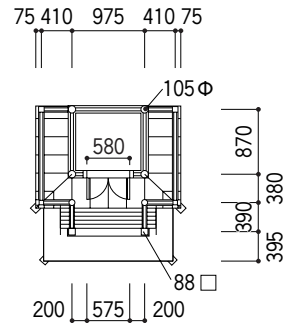


図18 本殿平面図



図19 彫刻脇障子



図20 本殿腰組

4) 善覚寺大師堂 (表2-K) 所在地-神領本上角50番地

木造 桁行三間 梁間三間 方形造 茅葺鉄板巻

主屋-粽角柱 切目長押 内法長押 頭貫木鼻 (拳) 台輪木鼻 出三斗

正面中央虹梁型頭貫 中備彫刻墓股 (十二支) 一軒吹寄 疎垂木

内陣粽円柱 欄間中備彫刻 (彩色)

向拝-粽角柱 広一間 緋破風 頭貫虹梁型木鼻 (獅子) 連三斗

中備彫刻彫刻墓股 手挟 三方切目縁

(図21、22)

この大師堂は、緋破風の向拝を持つ方形造茅葺鉄板巻の三間堂である。

向拝柱の礎盤は石製のものが多いが、ここでは木の檣材 (根元近くの曲がりのある木) をうまく利用して加工されたものが使われている。また、向拝の屋根において元は茅を葺き降ろしていたと考えられるが、屋根の修繕時に鉄板張りとした為、破風板が二重となり、屋根に段がつけられた。中備墓股は十二支を彫刻し彩色を施したものが四面に配置されている。

内部は、奥一間を内陣とし、その奥半間に仏壇を構えている。柱は、粽円柱で、内法長押、頭貫、台輪で固め、出三斗の組み物が頂部に付く、正面中央欄間と中備部分においても彩色の彫刻が詰められている。

『神領村史』(昭和35年発行)によると、「棟札を見ると元禄八乙亥年三月吉祥日・・・大栗神領村惣光寺宝蔵院善覚寺・大工名西郡ノ内広野馬地・・・」と記述がある。彫刻や様式などから江戸中期の特徴があり、元禄8年(1695年)在郷の大工による造営と考えられる。老朽化が著しく、保存に向けた修繕を望む。



図21 大師堂正面

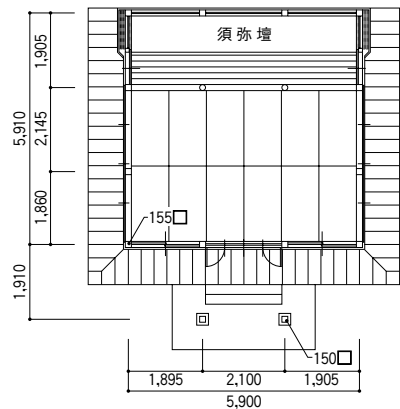


図22 平面図

5) 西明寺(表2-N)所在地-阿野大字広野字白嶽62番地

[本堂] 木造、桁行三間、梁間四間、一重、寄棟造、本瓦葺、向拝一間、
西面不動堂に接続

主屋-角柱(内陣柱のみ円柱) 面取 切目長押 内法長押 頭貫(木鼻)

台輪(木鼻) 大斗肘木 柱間中備^{はしらま} 慕股^{ひとのきまぼら} 一軒疎垂木
外陣^{げじんかかみてん} 鏡天^{じょう} 井(雲竜画) 弘化四年の記あり

向拝-角柱(几帳面取) 黄檗^{おうばくしゅう} 宗風礎盤 虹梁型頭貫木鼻(拳・錫杖彫)

出三斗 中備斗付慕股 手挟 三方切目縁 木階三級(板階段)

[不動堂] 木造、桁行二間、梁間三間、妻入切妻造、棧瓦葺、向拝広一間、

東面本堂に接続、西面方丈に接続

主屋-角柱、外陣^{ふきいた} 疊、内陣拭板張、

向拝-円柱、前面切目縁 切目長押

[方丈] 木造、桁行六間、梁間五間、寄棟造茅葺鉄板覆、四方下屋付本瓦葺、

北面半間突出部^{まなか} 庇^{ひさし} 付本瓦葺、東面不動堂に接続、西面庫裡に接続

[山門] 木造、切妻造、本瓦葺、一間四脚門(薬医門) 角柱、冠木、女梁、男梁、

地覆^{じふく}、観音開^{かんのんびらきかかみいたど} 鏡板戸

[鐘楼] 木造、切妻造、棧瓦葺、一間四脚内転^{よつあしうちころびしょうだい} 鐘台、角柱、腰貫、飛貫、中備慕股、

妻飾虹梁大瓶束^{ゆいわた} 結綿付、^{おがみ} 拜懸魚^{げぎょ}

(図23)

北条時頼(1227~63)がこの地に立ち寄った際、一寸八分の観世音菩薩を渡され、この時から草庵であったのを西明寺と改めたと伝える。承応年間(1652~55)に荒廃し、正徳4年(1714)に釈有善重によって再興される。真言宗古義派西大覚寺末で、金玉山の山号を持ち、十一面観世音菩薩を本尊とし、阿弥陀如来と弘法大師を脇仏とする。現在の伽藍は、北東の隅に山門を配し、東から鐘楼、本堂、不動堂、方丈、庫裡が建つ。

山門は、一間一戸の四脚門であるが、棟が若干内側に寄っており薬医門の形態をとる。柱は角柱で、組物を用いない。柱頭部には女梁に冠木を渡し男梁を架け、男梁の上部に束で棟木を受けて屋根を架ける。軒は一軒の疎垂木、屋根は切妻造で本瓦葺きの小規模で簡素な門である。扉は、観音開きの鏡戸を吊る。

鐘楼は、桁行梁間共に一間で、青石の基壇上に建つ。基壇の上に直接角柱を四方転びに立て、腰貫・飛貫で固める。柱頭部は、丸桁^{がぎょう}を置き、妻面のみ虹梁を組み大瓶束を立てる。柱間の中備には、妻面は彫刻慕股を、桁行側には三輪^{みつわ}の慕股を詰める。軒は一軒の疎垂木、屋根は切妻棧瓦葺きで、組物を用いない簡素な四脚内転鐘台である。

本堂は、桁行三間、梁間四間、寄棟造本瓦葺きの正面に、一間の縫破風の向拝を付け、

東側に収納のための室を設けた建物である。主屋の柱は角柱（角面）で、切目長押、内法長押、頭貫を回して台輪で固め、頭貫・台輪ともに木鼻を付ける。組物は拳鼻付大斗絵様肘木で、中備は墓股を詰め、軒は一軒の疎垂木とする。向拝の柱は角柱（几帳面取）で、黄檗宗風の礎盤の上に立つ。柱頭部（図24）は虹梁型頭貫に木鼻を付け、絵様肘木付きの出三斗で丸桁を受け、庇を支える。虹梁の底部には錫杖が彫られ、柱間には絵様肘木付きの彫刻墓股を填める。内部は手前一間を外陣、中央二間分を内陣とし、その奥に内陣柱（円柱）を立てて仏間を設け、本尊と脇仏を安置する。最奥一間は、棚を設けて厨子を置く。外陣全面と内陣側面の床は畳を置き、内陣中央と最奥の厨子室は拭板張りとする。天井は密教寺院には珍しく、禅宗寺院の仏殿の天井にみられる鏡板天井とし雲竜（図25）が大胆に描かれている。仏間の正面は沙綾形に若葉を刻んだ虹梁を鴨居にし、扉を棧唐戸にして豪華に飾っている。本堂の建立は天井絵に弘化4年（1847）と記され、幕末の建物である。

不動堂は本堂の西方に建ち、明治39（1906）年に成田不動（新勝寺）より勧請して建立した、桁行二間、梁間三間の妻入切妻造の主屋に、広一間の庇が付く小規模な堂である。

方丈は、民家を譲り受けて、再建したと言われており、外見上は民家風建物である。内部は改造され、正当な方丈形式の間取りとなったが、近年になって収納の部屋を付けるなどの改造の跡がみえる。庫裡は茅葺きの建物であったが、近年、屋根の葺き替え時に失火によって失い、新しいものが方丈の西に建った。当初はどの堂宇も独立して建っていたが、現在は山門と鐘楼以外は、廊下や位牌堂などでつながれている。

往時は遍路道の傍らにあって、参拝者も多かったが、車社会となり訪れる人も少なくなった。多くの堂宇がそろった寺院であるが、どれも折衷様式で純粹のものはない。

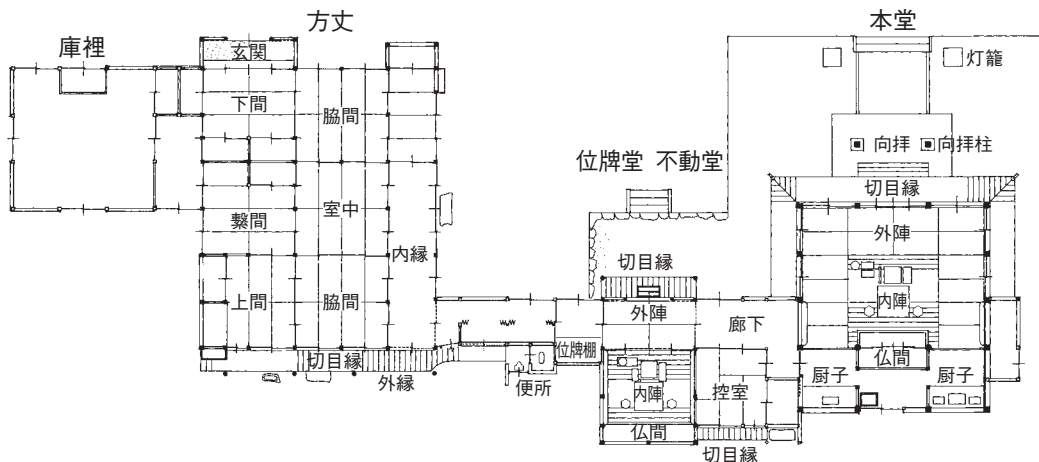


図23 平面図



図24 向拝の柱頭部組物と虹梁



図25 内陣外陣天井全体に描かれた雲竜の天井絵

4. 神山町の青石文化

神山町は三波川^{さんばがわ}変成帯と呼ばれる結晶片岩の地層上にある。結晶片岩には赤っぽい紅簾^{こうれん}片岩や白い石英片岩も混じっているが、そのほとんどは「阿波の青石」と呼ばれる緑青^{ろくしょう}色の緑泥片岩で構成されている。この青石は神社や寺院の境内、また棚田や屋敷の石垣などに多く使われ、地域色豊かな景観をつくり出している。以下に、その一部を紹介する。

1) 阿野折木の八坂神社にみられた青石の使い方

図26は八坂神社への長い石段であるが、踏み面には扁平で細長い青石が使われている。石目に沿って薄く割れる青石の特徴をよく生かした事例であり、表面は割ったままの状態（割肌仕上げ）で使われている。図27～30も同じ八坂神社でみかけたものであるが、これらも薄く割れる特徴を生かした事例である。図27は拝殿の向拝柱下の敷石であるが、神社正面の顔にふさわしく、幅2.4m・奥行き1.2mと一際大きな青石が敷かれている。また、図28は拝殿左手にある地神さんであるが、その基壇も扁平な青石で組まれている。普通、基壇は石を積み上げて築かれているが、ここでは長方形に加工した青石を四面に立てて枡形^{ますがた}を造り、その中に石を詰めて造られている。図29と図30は境内にある祠^{ほくら}の石垣と境内近くの棚田の石垣であるが、奇妙な積み方をしている。下部には扁平な青石を立て、その上に普通の石垣が築かれているのである。同町阿野の名田河地蔵堂^{なだこう}近くに町指定文化財の板碑17基（図31）が立っているが、この板碑群を連想させ「板碑垣」とでも名付けたくなるほど、板碑を意識した石垣普請である。

これらの事例からみても、県内の青石産地の中でも特に神山町は、扁平の大きな青石が豊富に採れたところだったのではないかと推察することができる。八坂神社でみられた「板碑垣」は、広野の西明寺（図32）など町内の数カ所でもみられたが、これは豊富に採れる扁平の大きな青石を、有効かつ豪華に使う手法として編み出されたものでないかと考えるのである。石を立てて積む手法は算木積み（註1）完成以前の石垣などにみられるが、

町内のものはそれと違い意図的に造られたものであると思われる。石積みのタブーとされる鏡張り（註2）の手法をあえて取り入れていることも興味深いところである。

（註1）算木積みとは、石垣の隅角部において行われる石積みで、石の長手の側面と短手の側面が交互に現れるように積み上げること。文禄・慶長期（1592～1615）ごろに完成したといわれる。

（註2）崩壊を防ぐため、石積みの断面は不均一にならないように積むのが基本であり、薄い石を立てて積む鏡張りは崩れやすいから避けなければならないとされている。

2) 屋敷や棚田にみられた石垣の築き方

町自体が青石の岩盤上に存在していることを端的に表しているのが図33の石垣であろう。石垣の下の部分は青石の岩盤そのものであり、手前の道はその岩を削り造っている。その奥には削り取った石を積み上げて石垣を築き、屋敷を造っている。そこにはその地で生きていくための汗と涙の結晶がみえてくる。これは乱積みの粗い積み方にも現れているように、石工の手によるものではなく、家人自らが岩を砕き造ったものである。砕いた石は棚田や屋敷を造るために積むという、原始的ではあるが無駄のない普請に感動を覚える。

図34の屋敷の石垣も町内でみられたものであるが、前者に比べると築造年代は新しいと思われる。石垣は水平に目地を通す布積みという手法で築かれており、水平に延びる石段との組み合わせで見応えのある造形をつくり出している。左側上部に一部水平ラインを崩す乱積みの手法がみられるが、これは規則正しいものをあえて崩す日本人独特の造形美とみることができるのではなからうか。

今回調査でみた町内の青石の構築物は、ほんの一部にしか過ぎない。しかし、その中で薄く割れる青石の最大の特徴を巧みに生かした「板碑垣」は、地域独自の石垣普請であり、町の誇れる青石文化であったように思う。



図26 八坂神社の石段



図27 八坂神社拝殿の敷石



図28 八坂神社境内の地神さん



図29 八坂神社の祠の石垣



図30 八坂神社近くの棚田の石垣



図31 名田河の板碑17基



図32 西明寺境内の墓碑群と石垣



図33 民家の石垣



図34 民家の石垣(上分)

5. おわりに

神山町は5カ村が合併しており、神社、寺院の数は他の町村より多く現存している。地理的にも徳島市などの市街地に近いためか、建替えも多くなされていたが、明治期、江戸幕末にさかのぼる社寺の数は比較的多く、町の文化財指定が3件あるなど、みるべきものは多かった。また、調査の際名田河のお堂改修に出会い、美郷村の後藤田家の古材によるものとわかった。

なお、社寺建築の建立年代については、棟札や古文書などで確認できたものもあるが、確認できないものについては、様式で判別した。

参考文献

- ・『阿野村誌』河内義計発行 昭和33年3月31日
- ・『神領村誌』名西郡神領村誌編集委員会発行 昭和35年7月1日
- ・『下分上山村誌』下分上山村誌編集委員会発行 昭和36年8月1日
- ・『神山町勢要覧』神山町役場発行 昭和50年4月1日
- ・『広辞苑』岩波書店発行 昭和53年9月25日
- ・『上分上山村誌』上分上山村誌編集委員会発行 昭和53年12月10日
- ・『徳島県神社誌』徳島県神社庁発行 昭和56年1月1日
- ・『角川日本地名大辞典・36徳島県』角川書店発行 昭和61年12月8日
- ・『総合学術調査土成町・阿波学会紀要第36号』阿波学会・県立図書館発行 平成3年3月20日
- ・『鬼籠野村誌』鬼籠野村誌編集委員会発行 平成7年3月31日
- ・『神山の民俗』徳島県文化振興財団発行 平成8年3月18日
- ・『徳島の文化財「建造物」』(社)徳島県建築士事務所協会発行 平成6年12月30日
- ・『阿波の寺社建築』阿波のまちなみ研究会発行 平成9年3月31日